

にじよめ

共生する暮らしへの、二歩目



夏、
どう遊ぶ？



あの人に聞いてみた 「地域」に生きる「地域」を活かす



今回うかがったところ

高知県黒潮町
NPO砂浜美術館

お話をうかがった方



村上健太郎さん

1976年、神奈川県出身。NPO砂浜美術館事務局長。モットーは「地域を楽しむ。日常生活を楽しむ」。黒潮町（旧大方町）へ5年前に移住。あやしい幡多弁を使って、地元の人たちに突っ込まれる日々。

地元と外の人をつなぐ仕組みを「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」高知の黒潮町にこんなコンセプトをかかげたNPOがあります。その名も砂浜美術館。豊かな自然は地元の人たちにとっては当たり前で、ともすれば「何もない」と思ってしまうがち。でも、ものの見方を変えようというんな発想が湧いてくる…。一過性のイベントではなく考え方を広めていこう！というのがこのNPOの始まりだそうです。その考え方の元に、数々のイベントが行われています。

たとえば『Tシャツアート展』は「存知の方も多しはず。写真・絵画展は室内ですもの」という考え方を世界ではじめて取り扱った美術展は、浜辺にロープを張り、洗濯物を干すようにTシャツを並べます。波が寄せるとTシャツが砂浜に写り、風が吹けば踊りだします。また、今まで海に流れついたもの、ゴミだったものを「作品」としたのが『漂流物展』。貝のようにロマン溢れるものから、農薬容器など環境問題を考えさせられるもの、また自然によって彫刻された流木など、集まる作品は限りありません。またまた、花見といえは「桜」の常識を覆す『ラッキョウの花見』もあります。

最初は懐疑的だった地元の人たち

田貫湖ふれあい自然塾通信「にほめ」48号



の中にも、イベントに訪れた人から「この町すこいね」と声をかけられたり、若いボランティアが無償で来て一生懸命働く姿を見て、自分たちの町でもしかしてすこいのではないかと意識が少しずつ変化してきている人も出てきているとのこと。

村上さんが事務局長になってからは一部の人だけが盛り上がるのではなく、常に地元の人と外の人に関わりあえる仕組み作りを目指したと言います。廃校を宿泊施設として設備を整え旅行業を取得。地元のおばちゃんや外部から訪れた人をもてなす場を作り、外部の人と黒潮町で暮らす人が触れ合える仕組みができました。第2の故郷や第2のお母さんという感覚を持っている人も少なくないといいますが、過疎化に歯止めをかけるべく、ボランティアに来る女性と地元独身男性の交流を盛り上げるなど、心をくすぐられる活動が溢れています。

「今後は、今までの活動をベースに地域の経済に貢献していく」ことが村上さんのこれからの夢。黒潮町と砂浜美術館の取り組み、視点のユニークさが絶品です。ぜひ注目してみてください。

編集後記
自然塾も夏本番。忙しいけど夏しか会えない常連さんとの再会が楽しみ♪